

## 前期ドゥルーズ哲学における *esthétique* 概念について

内藤 慧 (東京大学)

---

ジル・ドゥルーズが芸術をその哲学の主題とするのは、『感覚の論理学』、『シネマ』、『哲学とは何か』など、いずれも後期著作においてである。だが彼の美学的関心は前期著作にも現われており、彼の哲学において重要な地位を持っている。本発表は、前期著作である『差異と反復』(以下 DR)における、独自の *esthétique* 概念に注目したい。

DR では、カントは『純粹理性批判』において *esthétique* 概念を「感性的なものの理論」 *la théorie du sensible* と「美の理論」 *la théorie du beau* という2つの意味に区別し、前者のみをその理論哲学で論じたとされる。ドゥルーズは、この理解によってカントが理論哲学の対象を、一般性を帯びた経験のみに限定し、主体の表象作用のなかで感性を論じたとして批判する。そしてカント哲学に対して自身の哲学を「超越論的経験論」と名付け、「感性的なものの」と「美の」という2つの意味が混じり合うものとしている。つまり、*esthétique* 概念は認識論的な表象作用における感性についての議論に限定されず、美の側面も併せ持つ独自の概念として提示される。こうして DR が提示する哲学は頻繁に芸術作品を例示に用いることになり、芸術作品に特異な地位が与えられることになる。

ところで、バウムガルテンにおいて *Ästhetik* は「感性的認識の学」と「美の学」という意味を併せ持つ概念だが、ドゥルーズの提示する *esthétique* 概念をバウムガルテン的語法への回帰として解してはならない。ドゥルーズは『カントの批判哲学』(以下 PCK)において「能力論」という観点から、感性を不明瞭な悟性と解するヴォルフ学派に比して、むしろ感性に独自性を認めるカントを評価している。カント批判を含意する *esthétique* 概念も感性の独自性を扱う「能力論」、「感性論」として、ある意味でカント的文脈において規定されているのだ。

本発表では、①DR を中心に前期ドゥルーズにおける「感性論」かつ「美の理論」としての *esthétique* 概念を巡る議論を概観し、②前期ドゥルーズの哲学における芸術の特異な地位を再確認するとともに、③この議論の背後にある「能力論」という文脈を PCK から明らかにし、「感性論」かつ「美の理論」としての *esthétique* 概念を、芸術に特異な地位を与える能力論、として規定する。これらの過程を通して、ドゥルーズ美学研究における前期ドゥルーズ哲学、とりわけ *esthétique* 概念の重要性を主張したい。